

氏 名 田副 真美
 学位の種類 博士（ヒューマン・ケア科学）
 学位記番号 博甲第 8662 号
 学位授与年月 平成 30年 3月 23日
 学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
 審査研究科 人間総合科学研究科
 学位論文題目 小児摂食障害の臨床像および心理・社会的特徴と
 母親の心理的特徴

主	査	筑波大学教授	教育学博士	徳田克己
副	査	筑波大学准教授	博士（医学）	森田展彰
副	査	筑波大学教授	博士（学術）	水野智美
副	査	埼玉県立大学教授	博士（看護学）	古谷佳由理

論文の内容の要旨

田副真美氏の博士学位論文は、小児摂食障害のある子どもの臨床像と子どもたちの心理・社会的特徴を明らかにし、加えて子どもの母親の心理的特徴が子どもの臨床像と子どもの心理・社会的特徴に与えている効果を詳細に検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

本論文の研究背景として、第1章では小児摂食障害の定義づけをし、疫学、発生機序、臨床像の特徴について先行研究を概観し、前思春期での発症の増加、やせによる身体への重篤な影響、拒食から過食などへの移行が予後を不良としていることなど、小児摂食障害の現状と問題点をまとめている。そして、これらの背景をふまえ、本論文全体の目的は、小児摂食障害の中心症状である神経性やせ症の制限型を対象とし、後方視的に小児摂食障害のある子どもの臨床像および心理・社会的特徴とその母親の心理的特徴を明らかにすることであると述べている。

第2章から第4章では、著者が心理臨床を行っている獨協医科大学越谷病院（2017年11月より、獨協医科大学埼玉医療センター）小児科を1996年1月～2012年12月に受診し、DSM-IV-TRおよびGOSC(Great Ormond Street Criteria)により神経性やせ症-制限型と診断された患児159名（初診時年齢12.5±1.7歳）を対象として、臨床像（発症年齢、初診時年齢、初診時身長、体重、BMI、初診時月経現象、初診時初経発来の有無、受診経緯、発症契機、体重減少の原因、入院期間、精神疾患などの併存障害、症状移行）、心理・社会的状況（不登校、問題行動、家族負因）、抑うつと不安に関する心理検査結果を、カルテの記載より調査している。

第2章では、小児摂食障害の全体像として、12歳以下での発症が多く、発症の契機ではストレスが原因となり、体重減少に至っているという小児摂食障害の特徴を明らかにしている。また、先行研究との比較では、発症年齢、初経年齢、症状移行や併存症の出現率が標榜している科によって違いがあることを明らかにしている。心理的側面において、13歳以上の患児では、思春期の心性と抑うつや不安感という心理的背景を考慮する必要があることを指摘している。BMIを重症度の指標とし、初経発来と母親負因がBMIの影響要因であることを見出している。

第3章では、第二次性徴の評価の1つとして初経の発来に注目し、初経発来の有無の違いによる小児

摂食障害の特徴を明らかにしている。初経年齢早期化による心身の変化と摂食障害発症との関連の可能性を見出し、初経未発来で発症した患児の身体的な予後の問題を指摘している。

第4章では、症状の重症化や遷延化するといわれ、増加傾向にある症状移行に着目し、症状移行の有無による臨床像、心理・社会的特徴の違いを明らかにしている。症状移行が認められた患児は、容姿に対する関心の高さや容姿への否定的な気持ちの強さなどが発症の契機となり、痩身願望によるダイエット行為につながっていると指摘している。また、容姿に対する関心などによる発症契機や治療過程における不登校や自傷行為が、症状移行の危険因子であることを見出している。著者は、症状移行の患児には初経発来が多いこと、初経年齢が日本人の平均よりも低かったこと、体重減少に至る原因がダイエットであることが、症状移行の患児に多く認められたことを指摘している。そのような結果をふまえて、発達加速現象のような身体的な早熟化と痩身願望によるダイエットが、症状移行に関連していることを指摘している。また、このような臨床像は、小児摂食障害の特徴ではなく、成人の摂食障害の臨床像に近いものである可能性を指摘し、今後さらなる検討が必要であると述べている。

第5章では、第2章において、母親の摂食障害や精神疾患などの負因が、体重の減少に何らかの影響を与えていることが示唆され、第4章において、症状の移行のある患児に母親の負因が多く認められたことから、小児摂食障害の神経性やせ症・制限型の患児59名(12.5±1.7歳)および母親75名(43.2±4.8歳)を対象とし、外来で実施されたエゴグラムをもとに、心理的特徴とその関連を明らかにしている。投映法のエゴグラムと質問紙法のエゴグラムを対比し、感情の抑制傾向などにより、何らかの心理的不適応状態の存在が推測される母親と適応的な行動パターンを有している母親の存在を指摘している。何らかの心理的不適応状態の存在が推測される母親は、自分に自信がなく自己抑制的で、他者との関係を良くしようとする自己否定・他者肯定型が多く認められ、これまでの摂食障害の母親のエゴグラム研究と同様の結果が得られたと述べている。また、そのような母親をもつ患児は自己抑制的な特徴を有していることを指摘している。

第6章では、総合考察として、本研究での成果をふまえ、小児摂食障害の全体像としての臨床像および心理・社会的側面の特徴を述べ、初経未発来での発症は、身体的後遺症を生じる可能性や発達加速現象のような身体的な早熟化と痩身願望によるダイエットが、症状移行に関連していることを指摘している。また、心理的に不適応状態にある母親の養育態度が、摂食障害発症の準備因子や症状の持続因子となっている可能性もあり、今後より詳細な検討していく必要があると述べている。

審査の結果の要旨

(批評)

本論文は、小児摂食障害のある子どもの臨床像と子どもたちの心理・社会的特徴を確認し、加えて子どもの母親の心理的特徴に着目して明らかにしたものである。このことは、小児期摂食障害の発症年齢や初経発来の有無により、臨床的特徴や心理的特徴の違いがあることを明確にし、発症のメカニズムや治療における介入の違いがあることを明らかにした。また、症状移行の危険因子を明らかにできたことは、小児摂食障害の遷延化の予防の一助となる。これらの結果は、今後の小児摂食障害治療において臨床的に意義があるものであり、本研究の重要な成果として認められる。心身医学の領域ではエゴグラムによる臨床研究は多く、摂食障害の患者および家族の研究も多い。しかし、小児摂食障害の母親へのエゴグラムによる研究は少なく、本研究のような投映法と質問紙法のエゴグラムを対比した先行研究がないことから、独創的な研究であるといえる。また、その結果は小児摂食障害をもつ母親への理解や心理的援助につながるだけでなく、患児への治療協力者としての関わり方への有効な情報となりうる。以上、本論文は研究の意義、独自性、妥当性、研究成果、論文のまとめ方において、博士論文としての水準に達していると判断できる。

平成30年1月10日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士(ヒューマン・ケア科学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。